

# カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2019年6月 91号



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5  
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com  
http://keaf-japan.com

## 大学奨学金プログラムは終了

### 11年間で11人が巣立った

2019年度(18.11~19.10)のカンボジア現地での支援活動は6月末から7月初めの次年度奨学生選考のための面接を残すだけになりました。その準備を進めています。次年度の奨学生枠は、高校生は140人(今年度実績は142人)、教員養成所学生12人(今年度通り)です。大学奨学生は最後の1人が7月に卒業すれば、大学生への奨学金給付は11年間で11人の「学士」を社会に送り出して役割を終えます。

### 「大学ブーム」へ橋渡し

#### 「夢」が勉学意欲高める

大学奨学金プログラムの11年はカンボジアの「大学ブーム」の高まりと並行していました。プロモルプロム高校への奨学金給付を始めたころ、やっと高校に行きたいという子供が増えてきたというだけで、大学まで進む生徒はいませんでした。

そんな中で校長先生から「1人でもいいから大学生にも奨学金を出してもらえないか、高校で終わるのではなく、大学に行けるとい夢があると勉学意欲がすごく高まるから」と要望されました。これを熱心に後押ししたのが、KEAFから派遣されて1年間ホームステイし、同高校の生徒と交流しながら日本語を教えていた児玉裕史君(大学生)でした。

大学進学となれば授業料も数百ドル、首都プノンペンでの下宿代や生活費も必要です。高校生奨学金は年額40ドルで始めました(①円高に合わせて11年度から50ドル)。その10倍はかかりそうです。しかし、学校の強い要望と児玉君の熱意を受け止めて大学奨学金に踏み出しました。



### 《奨学金プログラムの実績》

| 年度     | 高校生   | 大学生 | 教員養成所 |
|--------|-------|-----|-------|
| 08     | 41(人) | 0   | 0     |
| 09     | 51    | 1   | 0     |
| 10     | 68    | 1   | 0     |
| 11     | 82①   | 2②  | 0     |
| 12     | 90    | 4   | 0     |
| 13     | 106③  | 4   | 4     |
| 14     | 136   | 7   | 8     |
| 15     | 165   | 6   | 8     |
| 16     | 164   | 5   | 7     |
| 17     | 145   | 4   | 7     |
| 18     | 145   | 2   | 10    |
| 19(予算) | 140   | 1   | 12    |

### Uターン先生が希望

プロモルプロム高校からの大学奨学生1号は、カンボジアのトップ、王立プノンペン大学に合格したレン・サイ君でした。同君が3年に進むころ、ある支援者から大学奨学金の基金として300万円の提供を受けました。提供者の名前を取って「楓基金」と名付け、奨学生を毎年2人としました(注②)。第2号のリム・セーラさんもプノンペン大学に合格。

2人とも将来の希望は郷里にUターンして高校の先生になることでした。高校の先生になるには学部4年を卒業してから1年の教員養成コースが加わり、さらに1年間の実習を経なければなりません。

(写真は大学奨学生と懇親)

→次頁中段に続くー

## 同 (15)

・高校生奨学生の紹介はこれで終わり。  
2019年度の高校奨学生は6高校、計142人。

## ◇大学奨学生 (1人)

・2011年度に始めた大学生奨学金  
プログラムの11人目、最後の奨  
学生となった Bo Sros 君は7月  
に卒業予定。  
教員養成所奨学生12人の紹介は  
次の頁へ。

## (1頁からの続き)

レン・サイ君は2014年、化学の教員コースを修了しましたが、郷里プレイヴェン州の高校には空きポストがなく、タイ国境沿いのバットンバン州の高校の先生になりました。そこで小学校の先生と結婚、今では郷里のプレアスダイ地方よりさらに教育環境が劣る同地方の子どもたちのために頑張る気持ちになっています。

リム・セーラさんは2016年、クメール(カンボジア)文学科を首席で卒業、Uターンして郷里の高校の先生になっています。

## 農村にも高度成長の波

高校奨学生の選考面接で、将来の希望を聞くと「学校の先生」がほとんどでした。100%近くがコメ作り農家というこの地方では、先生がほとんど唯一のかっこいい職業だったのです。ときたま「お医者さん」という子どもがいました。家族が病気になってもどうしようもないという現実がうかがえました。

プノンペンに行ったことがあるかの問いには、全員が「ノー」でした。そこでマイクロバスを数台チャーターして高校卒業前の3年生を日帰りのプノンペン修学旅行に連れて行き、3年間続けました。

しかし、時代は急速に変化していました。フン・セ

ン政権の「開発独裁」がスピードを速め、経済特区に外国資本の大工場が立ち並ぶようになり、農村のお父さん、お兄さん、さらに高校生の「出稼ぎ」が始まりました。奨学生選考の質疑で将来の希望は依然、先生が多数ですが、会社員、銀行員、エンジニア、通訳など、子どもたちの世界がそれだけ広がりました。

## 大学倍増—「夢」も膨らむ

並行して「大学ブーム」が起こりました。大学は首都に国立大学が11あるだけでした。この10年足らずのうちに地方3都市を含めて25の私立大学が開校、短期大学や専門学校も数多く生まれました。大学進学の小さな「夢」もちょっと膨らんだといっているのでしょうか。

KEAFの大学奨学生もいろんな大学に進み、卒業後も先生、医者からさらに様々な分野の仕事に就くようになりました。

高度成長には光と影の部分があって、農村がみんな豊かになったわけではなく、今でも農村からの大学進学は容易ではありません。それでも「1人でも、勉学意欲を高めるために」というKEAF大学奨学金の役割は終わったようです。

# ありがとうございました (2019年3月1日～5月31日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます (敬称略させていただきます)

(宮崎) (東京) (神奈川) (神奈川) (長野) (神奈川)  
(千葉) (東京) (大阪) (東京) (千葉) (東京)  
(東京) (神奈川) (静岡) (東京) (東京) (東京)  
(埼玉) (東京) (神奈川) (東京) (兵庫) (東京)  
(神奈川) (神奈川) (東京) (東京) (東京) (東京)  
(東京) (東京) (東京) (神奈川) (神奈川) (東京)  
・ (大阪) (兵庫) (埼玉) (東京) (群馬) (東京)  
(京都) ※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています。※奨学生紹介の3～7頁は個人情報保護のため省略

## フン・セン政権の中国接近 日本の影響力大きく後退

カンボジアではフン・セン首相が長期独裁体制を一段と固めると並行して中国寄りの姿勢を強めてきた。欧米諸国はフン・セン体制に批判を強めて、援助停止などの制裁に出ている。日本は「最大の支援国」としての発言権があるはずだが、あいまいな姿勢をとり続けているようで、このままでは日本の影響力はどんどん後退するのではないかとと思われる。

フン・セン首相と与党人民党は、昨年の総選挙を控えて国民の不満の受け皿になって支持を広げてきた野党、救国党を「米国と共謀して政府転覆を図った」といった理由で解党に追い込んだり、政府に批判的なメディア潰しを進めたりして1党独裁体制を固めてきた。そのうえで昨年の上下の両院選挙で全議席を独占した(上院ではほかに少数の推薦議員)。

## 野党なし選挙で米欧硬化

この選挙に対して欧州諸国や米国は、野党抜き選挙は民主主義ではないと、選挙支援などの援助を停止した。米欧が態度を硬化させている背景には、フン・セン首相が中国寄りの姿勢をますます強めて、南シナ海島嶼領有権をめぐる中国と周辺諸国との対立で、カンボジアがラオスとともに中国支持の立場を貫いていることがある。

フン・セン派は元々は1975年に全土を制圧して恐怖政治を敷いたポル・ポト派の一勢力だったが、ベトナムの支援を受けてポル・ポト派をプノンペンから追い出してタイ国境のジャングルに追い込み、実権を握った。フン・セン派はベトナム、ソ連の支援を受け、

ポル・ポト派は中国と米国の後ろ盾を得て、冷戦時代の両陣営の代理戦争として長い内戦が続いた。冷戦終結でこの代理戦争も終わり、ポル・ポト派は消滅、以来フン・セン氏の長期政権が続いている。

## 中国、着々と関係強化図る

しかし、カンボジアとベトナムは歴史的な対立関係にある。中国は1990年代末期にフン・セン体制が固まると、温家宝、胡锦涛から現在の習近平主席まで、歴代トップがフン・セン氏との間で接触を積み重ねて取り込みを図ってきた。

日本はシアヌーク国王(2004年退位、同12年死去)が親日的だったこともあり、カンボジアとは長い友好関係を持っている。内戦終結のパリ和平協定合意や国連監視下の制憲議会選挙で積極的な支援を引き受け、その後の経済援助でも主導的役割を担った。

しかし、いまや中国が有償・無償援助、投資額では日本を抜いて最大になったとみられている。カンボジアはその借金を払いきれないだろうといわれる。中国支持に対するリベートなのかもしれない。

日本は米欧のように、カンボジアの人権弾圧を批判することはしない。総選挙では投票箱など選挙実務の支援を継続した。南シナ海問題で中国支持にクレームもつけていない。経済援助もかつてのようにありがたがられなくなっている。

フン・セン批判をすると、さらに中国側へ追いやるという配慮があるのかもしれない。しかし、その配慮がフン・セン氏に評価されるとも思えないのだが。

写真:日本の援助で2015年完成したベトナムと結ぶ国道1号線のメコン川をまたぐ翼橋。

